

## 秋田高専における新入学生の英語学力調査

佐藤 孝・播磨谷 一雄・年代 正孝・幸野 稔・杉村 泰教

### An Analysis of the Results of English Achievement Tests Given to First-year Students

Takashi SATO, Ichio HARIMAYA, Masataka NENDAI,  
Minoru KONO, Yasunori SUGIMURA  
(昭和59年10月20日受理)

The paper here delivered is an analysis and consideration of the results of achievement tests given annually to 1st year students by the English faculty at Akita National College of Technology. The tests were started in 1977, but in 1981 the contents were changed to conform to the Revised Course of Study. At this time we will survey the test results of those incoming students from the years 1981, 1982, and 1983. In junior high schools, the number of lesson hours in English has decreased year-by-year since 1982. For example, the incoming students of 1981 had four lesson hours per week throughout their total school years, but those of 1982 had only three hours in the third year. The students of 1983 had three hours in both the second and the third years. In view of this situation, we must consider what the teaching should be at our college.

According to our survey at this time, the learning in junior high schools develops skills in the 'hearing-speaking' area, but we notice an inadequacy of grammatical knowledge in the 'writing' area, and an inability of understanding context in the 'reading' area. On the whole, the learning in the third year is not consolidated.

In order to attain our goals in English teaching at this college, we must set our hearts on motivation in learning, the application of essentials, and individual instruction.

#### 1. はじめに

本報は本校英語科で作成した英語一斉テストの結果と、その分析及び考察である。

本校での新入学生に対する英語一斉テストは昭和52年度より実施され、その後、中学校及び高等学校での指導要領の改訂に合わせ問題を改めているが、三年間は同問題を課すことを原則とし、学力を比較検討できるようにし、学生の英語学力の定着状態を把握し、その後の英語学習、指導に役立たせる目的を持つものである。

テスト時間はテープによる「聴きとりテスト」を含め50分である。その結果を高専入試の得点と併記し、さらに一年終了時に学生末の評価を書き加えることにより、学生個人の入学時の学力とその後の学習状況を検討できるようにしている。

問題作成にあたっては4領域をほぼ平均して出題しているが、第一回目のテストよりすでにテープに

よる「聴きとりテスト」を加えている。秋田県では公立高等学校の英語入試に「聴きとりテスト」が実施されたのはようやく59年3月からであることを考えるなら、一年次にLL授業、二年次には米国人による週2時間の英会話授業を行うなど、音声指導に重点を置く本校の英語教育の特徴を示す出題といえる。

本報告のテスト問題は昭和52年7月に告示された学習指導要領に合わせて作成され、中学校での週当たりの授業時数が表1のように、それぞれ違う入学生を対象にして実施されたものである。

表1 中学時の週当たりの授業時数

年度	学年	1	2	3	合計
56年度	入学生	4	4	4	12
57	〃	4	4	3	11
58	〃	4	3	3	10

この指導要領には(1)〔S+V+O+C〕の文型で、Cが形容詞、toのない不定詞、及び現在分詞である文、(2)不定詞の原因を表す副詞用法等、多くの事項が高等学校段階の学習に移行されることが明記されているが、それ以外の事項でも中学校用の新教科書にとり入れられていないものもかなりの分量に達し、総体的にみて、前の教科書の言語材料の残存率は1年95%、2年95%、3年75%程度とみられている。<sup>(1)</sup> さらに語彙の減少に注目しなければならない。表2のように、新教科書において、高等学校終了時で最多とする語数(2950語)は、従来の教科書の最少の語数(3350語)に及んでいない。

表2 語数の比較

	改訂前教科書	新教科書
中学校	950~1100	900~1050
高 1	700~1100	400~500
高 2	800~1200	600~700
高 3	900~1300	400~700
合計	3350~4700	2300~2950

このように中学校での授業時数、学習事項の減少により、定着度も低下し、同一問題によるテストを課すとすれば正答率も下がるという仮説が一応成立する。しかし現実には受験生の倍率が年度によって異なり(表3)、入学生の学力に微妙な差が生じ、また問題によっては中学時の時間数減との連動の程度が異なることなどにより、この仮説は修正されるであろう。

表3 志願者数の推移

年 度	56年度		57年度		58年度	
	志願者数	倍率	志願者数	倍率	志願者数	倍率
機械工学科	45	1.1	57	1.4	93	2.3
電気工学科	119	3.0	131	3.3	156	3.9
工業化学科	54	1.4	52	1.3	80	2.0
土木工学科	68	1.7	41	1.0	80	2.0
総合	286	1.8	287	1.8	409	2.6

(定員は各科40人)

中学校における英語授業時数、学習内容の変化が新入学生の入学時の学力に及ぼす影響を推測しつつ、学生の英語力を的確に把握し、高専において指導すべき分野を明確にすることにより、高専の語学教育の振興と強化にあたって掲げられた(1)英語専門文

献の読解力の育成、(2)英語技術論文の起草力の育成、(3)日常英会話の基礎能力の育成<sup>(2)</sup>の目標達成に資することを念願するものである。

## 2. 分析及び考察

### 2・1 Ⅰについて

IからIVまでは全てテープを聞いて答える問題で、時間は約7分である。テープは本校の外人講師(男性、30歳)に依頼し吹き込んだもの、及び市販の教材を編集したものである。

「聞き・話す」技能の評価には、いわゆるペーパーのみのテストはできるだけ避ける方が妥当で、ペーパーでのアクセントの問題と実際の聞きとりテストとの相関係数は、例えば中学一年生と高校二年生の段階で0.13、0.22と極めて低く、有意性は認められていない。<sup>(3)</sup> 一方、口頭によるテストは実施面でいくつかの困難な点があり、多人数を対象に一斉に実施するテストの中に入れることは無理であろう。本校ではこのような観点から「聞きとりテスト」のみを初回の一斉テストから実施しているものである。

Iは強勢のおかれる語を選択する問題で、その2は強く発音される部分が対照のため通常的位置から移動している例である。英語のリズムは、強く発音される音節が等間隔に現われることが基本になっており、話される英語を理解するためには、この強調される音節を正しく識別することが必要である。

2で正答者の割合が40%→43%→45%(以下、56年、57年、58年の年度毎の変化はこのように→印で示す)と少しずつではあるが上昇しているのは中学校での「聞き・話す」指導が、授業時間数の減少にもかかわらず効果をあげていることを示している。

IIは対立を聞き分ける問題で、1、2とも五つ全てを正しく答えた場合のみ正答とした。1は〔s〕と〔θ〕の識別で、予測された正答率であるが、一般に学力の低い学生にこの区別に関心な者が多く、指導を徹底させる必要がある。2は意味を持つ語群中でのhisとherの識別で、実際の話し言葉の中でこの非頭位形はそれぞれ〔iz〕、〔ə〕の弱形となり、しかも隣接のofとの結合によって同化現象を起こし、識別しにくい部分と考えられている。しかし、明瞭に区別して発話しようとする気持が無意識のうちに吹き込みに現われ、数値的にやや疑問のある結果になったのは残念である。

IIIは40語以内の英文を聴き、文中の「私」は何かを五つの選択肢から選ぶ問題である。選択肢の単語

## 秋田高専における新入学生の英語学力調査

はいずれも外来語として使われている簡単なものなので、説明文の英語を正しく聴きとることができれば容易に答えられよう。1において3年間の誤答者の総数は69人であるが、その90%に近い61人が book-store と答えているのは、説明文の中にこの語を聴きとることができたために、かえって間違えて選んだものであろう。2は make me, put me, eat it と代名詞が目的語で、弱形といわれる発音形式で、make, put, eat の簡単な動詞が後に続く弱形の代名詞と結合した形で耳に入り、聞きおぼえのない単語になる。この発音と識別は日本人の不とくいとするとところで、正答率は50%前後に落ちている。弱く発音する部分を自分でも弱く読む練習を充分積み重ねるばかりでなく、弱く発音されることを予期して英語を聞く習慣を身につけたい。会話中のある単語だけを切り取った場合、理解できるのは母国語ですら50~55%といわれるが、それでも母国語の場合は全体の会話は把握しているわけで、外国語の学習にあたってこの「予知能力」を養う必要がある。

IVは英問英答で、その中の1は、明日が日曜日で家族がピクニックに行くという条件が示された後に設問がなされる場合、2はいきなり疑問文が提示される場合である。1では90~95%の学生が答を書いているが、その半数以上は Saturday のスペリングを間違えている。正しく書けなかったとはいえ、90%以上の学生が英語を正しく聞きとり、英米人には理解できるであろう応答をしているわけである。基数、序数、曜日、月名等の基本的な単語を正確に書けない新入生は、このように半数はいると思われるので、入学後に定着させる必要がある。2の設問の英語は低学力者にとっても充分理解の射程内であるが、ほぼ日常の会話に近い速さで読まれるため、正答率は低い。正答、一部正答、誤答、無答の四段階に分け、学生の総合点と比較してみると、総合点で80点以上の学力の高い学生52名の半数以上にあたる27名が正答か一部正答を与えているのに対し、総合点40点以下の学力の低い89人は一人を除いて全員が誤答、無答に区分されている。音声把握の際の一瞬の迷い、遅れ、誤りが音素と言語形態との関係を全く断ち切り、しかも音声は瞬時に消失してしまうので、文字言語の習得にかけられる時間以上の時間を音声言語の習得にあてる必要がある。

①の得点と総合点との相関係数は0.63→0.58→0.61であり、「聞き・話す」技能と総合力の間にはかなりの相関があると考えられる。「聞き・話す」技能は決して独立して習得されるものでなく、「読み・書

く」技能に裏付けられていることが知られる。

学力が高いとされる学生は基本的な表現の繰り返し練習が中心となる英会話の授業に熱意を示さない場合がみられるが、知的好奇心に訴える密度の濃い教材を与えることにより、この学力の高いグループの「聞き・話す」力を更に向上させることができる。

## 2・2 ②について

1は正答率は85%から90%で定着している。誤答としては不注意で過去形にしなかったもの等があった。

2は正答率は75%から80%でほぼ定着している。発音のせいで south とした誤答がめだつた。

3は正答率は非常に低かった。その原因としては中学校の教科書では「変な」という語義しか載せていないということがある。また、正答率が上がってきているのは、この語の出現度が高まり、学習の機会が多くなったせいと思われる。誤答としては、初年度は wonder, 57年度以降は mystery が多かった。

4は正答率は低く、56, 57年度で20%, 58年度で27%である。正答の poor または bad はいずれも中学校では「貧しい、かわいそうな」と「悪い」という語義でしか扱っていないせいと思われる。

5は56, 57年度の間に正答率が70%から50%へと低下しているが、これは56年度の新課程への切り替えとともに、入学生の多い秋田市で教科書が New Prince に変わり、lend の出現度が5回から1回へと減ったことが影響しているのだろう。誤答としては、似た形の lent, rend, rent 等が多かった。

## 2・3 ③について

3を除けば正答率は90%以上で、各年度の差は殆どなく、この程度の文法事項は一応習得しているようである。3では56年度と他年度との間に10%近い差があるが、それは中学校で使用した教科書に一因があるように思われる。

秋田県では、53年から55年までは New Horizon から New Prince かが使用され、そのいずれにも問題の“be + fond + of + 動名詞”の型が3年次で扱われているが、56年度以降の教科書改定後は、これに類似した型(動詞詞の部分の名詞)が New Prince に出ているに過ぎない。このような中学校における学習事項の変更が正答率に影響を与えているように思われる。

## 2・4 ④について

この問題は文法・語法の理解力と運用力を試したものである。1・3の基本的語法と2・4・5のやや進んだ用法に分けて、それぞれの傾向を探りたい。

1・3はどの年度でも高い正答率を示している。いずれも文部省指定語が含まれている語法で、新入学生にほぼ定着しているのは喜ばしいことである。ただ、3の正答率が57年度と58年度の間若干低下している。誤答の大部分は“to~too”と書いたもので、全受験者のうち56年度が5.3%、57年度が4.8% (“to~to”も含めれば5.5%) だが、58年度は10.1%と倍増している。音声としては覚えていても、この表現の意味をきちんと理解していないために、綴りが不正確なものが少しずつ増えているのではないかと懸念される。

2は過去分詞の名詞修飾用法を関係節で表現できるかを、4は間接疑問、5は受動態の運用力を試したものである。中2後半から中3にかけての学習事項であるため、新入学生にとってはやや抵抗があったと思われる、1・3より正答率は低かった。以下に特に多い誤答内容を示し、検討したい。

2では、誤答者の中でも、( )内の語が代名詞であることはほとんどが理解していることがわかった。it (8.6%→19.9%→16.6%)のように人称代名詞で答えたり、who (3.3%→2.7%→3.0%)やwhose (1.3%→2.0%→3.0%)のように先行詞や格を無視した誤りは㊦Ⅲ。2と共通しており、入学後の指導で正しい用法の定着をはかりたい。

3で特に多かった誤りは、(1) I see (21.2%→15.1%→18.9%)、(2) did see (5.3%→11.0%→8.9%)、(3) to see (10.6%→9.6%→4.1%)である。(1)(2)は語順と時制の関係がつかめないための誤りで、(3)は“wh + to do”の型と誤認したためであろう。

5では、are taught (19.9%→15.8%→15.4%)、are taught (9.3%→7.5%→14.8%) がとびぬけて多い誤答である。いずれも、受動態であることは理解しながら、前者では過去分詞の形態の、後者では綴りの誤りをおかしたものである。

以上のように、誤答内容の多くは“mistake”ではなく、“error”、すなわち体系的な誤りであり、教師の指導の方向に示唆を与えるものである。(4)

㊦の各年度間の正答率の差は、2における56年度から57年度にかけての著しい低下(78.8%→61.6%)を除けば、特に目立ったものはない。全般的に、中学校の授業時間減の影響は、この領域にはあまり表われていないといえよう。

### 2・5 ㊦について

1は正答率は高く、定着している。誤答としては“wh+不定詞”の形を思い出せず、what Iとしたも

のと、日本語の「どうしたら」のせいでhowと答えたものがほとんどであった。後者の誤りは次第に増えてきている。

2は正答率は40%から47%まで次第に向上してきているが、依然として低い。fromとyoursと二つの互いに独立したポイントがあるため誤答が倍加している。

3は正答率は83%から85%で定着しているといえる。誤答としてはwhichのところはwhatを、betterのところはbestを入れたものがほとんどであった。

4は正答率は77%→71%→61%と低下してきている。その理由としては“have been + 形容詞”という形は新しいNew Princeには出てこないことと、illという単語も出てこなくなったことが挙げられる。(5) そのせいか(イ)のところにsickとsinceを入れたものが目立った。

5は日本文と英文とで否定語の位置がずれているもので難しかったと思われる。正答率も非常に低かった。

### 2・6 ㊦について

この問題は読解の領域で、会話の場面の理解力、文脈の把握力を試したものである。

I. 1. この問いは、特に文脈との関連を考えなくても、基本的な文法力があれば答えられるためか、ほぼ満足すべき結果が得られた。誤答の大部分は次の4つの類型に分けられる。年度毎の全受験生に対する割合と共に示す。

(1) spokenの綴り違い——spoken, spokn, sporkn など(6.0%→5.5%→4.7%)

(2) speakedおよびその綴り違い(1.3%→5.5%→2.4%)

(3) spokeおよびその綴り違い(4.6%→8.2%→5.9%)

(4) speakingおよびその綴り違い(4.0%→6.8%→4.7%)

(4)は全く理解できていない答だが、(1)(2)では過去分詞を書こうとした意図はわかるし、(3)ではspokeを過去分詞と考えた学生もいたと思われる。

I. 2. 正答率から見ると、56年度から57年度にかけて著しい低下が見られる一方、57年度から58年度の間はほぼ変わらないのであるが、人名別解答率を見ると、himがこの発話の主のToshioや呼びかけ相手のMakotoを指すという常識外の解答が58年度になって増えていることは、文脈把握力の極端に弱い学生が徐々に増えていくことの兆しとも懸念される。

表 4

年度 \ 解答	OKen	Toru	Hiroshi	Makoto	Toshio
56	77.5	8.6	10.6	2.6	0
57	66.8	11.8	18.5	2.7	0.7
58	68.6	5.9	15.4	6.5	2.4

○印が正答

I. 3. 主な誤答例を類型化して以下に示す。

- (1) 日本語訳を複文(補文を埋めこんだ構文)にしたために意味がずれたもの(4.6%→4.8%→7.1%) 「2・3 人の人々が私がつた今聞いたことを知っている」「少数の人々だけが知っていることを私はきいてしまった」など。
- (2) few の意味が理解できていないもの
  - a) 「数人の人々(少数の人々, 2・3 の人々)はそのことを知っている」(37.7%→49.3%→36.1%)
  - b) 「それはだれも知らない」(7.3%→2.7%→5.3%)
- (3) only の意味が理解できていないもの
  - a) 「私だけが(すでに)その事を聞いた」(17.2%→12.3%→13.6%)
  - b) 「私はちょうどそれだけ聞いた」(2.0%→3.4%→4.7%)

この小問では部分点を与えたので、以上の%は正答率とは必ずしも一致しない。正答率の低下、無答率の増加は56年度から57年度の間に顕著に表われていて、週3時間体制開始の時期と符合している。

この問題のポイントである few の否定用法と only の副詞修飾用法が秋田県で使用された新旧教科書でどう変っているかを調査してみた<sup>(6)</sup>。前者は、55年度以前の New Prince, New Horizon では中3で教えられており、56年度以降はこの二つの教科書では同様であるが、新たに加わった New Crown (大曲・仙北地区採用) では教えられていない。後者は、いずれの年度でもぴったり同じ用法では現われていない。以上の結果は、57年度における無答や誤答の増加を説明する決定的な要因とはならず、むしろ、中3の時間数減による学力低下のためと考えられよう。

I. 4. 年度毎に正答率が徐々に低下している。誤答の大部分は次の3つの類型に分けられる。

- (1) last (25.8%→27.4%→34.9%)
- (2) fast およびその綴り違い(4.6%→11.0%→9.5%)
- (3) fool およびその綴り違い(2.0%→2.7%→4.7%)

昭和60年2月

last という誤答が多いのは、数字の1とアルファベットの l がタイプ印字では同じになること、中学校で 1 st, 2 nd といった書き方に慣れてこなかった学生がかなりいることが原因であろうが、会話の場面を理解していれば見当がつくはずである。その点では(3)と答えた学生の方が、間違っはいるが、文脈はよりよく把握しているといえよう。

II. 各選択肢の解答率を以下に示す。

表 5

小問 年度 \ 解答	1				2			
	ア	イ	ウ	④	ア	④	ウ	エ
56	0	39.7	23.8	35.8	17.2	68.2	11.3	3.3
57	2.7	36.3	19.2	41.8	14.4	73.3	6.2	5.5
58	0.6	43.2	22.5	33.7	16.6	67.5	9.5	5.3

○印が正答

1の方が正答率が低いのは、文脈把握力の弱さだけでなく、エの文型が複雑でわかりにくかったことも原因と見られる。この種の問題では、選択肢の英文も十分に吟味する必要がある。

図全体の平均点は低下してきており、57年度と58年度の間には有意差は見られないが、56年度と57年度、および56年度と58年度の間には5%の水準で有意差が見られた。文脈把握力の低下は狭義の英語力のみならず、内容をじっくり考えるという習慣が衰えてきている兆候とも憂慮される。授業時数減の現状では、この領域の指導において中学校に多くを期待できないとすれば、高専入学後、特に重点を置く必要があろう。

2・7 ㉔について

表 6 ( % )

年度 \ 小問	1	②	3	4	⑤
56	4	39	6	7	44
57	4	39	11	7	39
58	4	38	9	10	39

○印は正答

表6に見られるように、2と5を合わせると高い正答率であり、問題文の大意を理解できた者が多いことを示しているが、表9からわかるように完全誤答率では5.2→7.5→9.3となり、年度が進むにつれて全く理解できなかった者が増加してきている。

II 1 誤答の中で最も多いのは、them の指すも

のとして単数名詞を答えている場合である。正答である stockings の s を落した誤りを不注意によるものとして除いても、その種の誤りは 38.4%→43.1%→62.3%と増加している。他に句や節を答えた者があり、代名詞 them の機能を理解していない者が増加する傾向にあることを示している。

2 この問題は an old man と a very kind man の区別を問うもので確実な読解力が必要とされる。また問題文が SVOC の文型であるため一層難しくなり、そのために各年度とも正答率は低い。誤答の中で最も多いのは old であり、70%→73.6%→78.7%となっている。これは文脈の把握力の落ち込みを示すものであり、本校における新入学生の指導に示唆を与えるものである。

Ⅲ 1 各年度とも正答率が非常に低い。この問いに答えるには、過去分詞 called の修飾用法の理解と内容に合った過去形の Be 動詞の選択が必要である。誤答例としては is が最も多く、次は関係代名詞を答えている場合である。is と答えた者は called の用法は理解していると考えられるが、注意力が時制にまで及んでいない。関係代名詞を答えた者は、過去分詞や関係代名詞の用法を十分に理解していないと考えられる。これらは中学校の3年における学習事項であり、新入学生に対してはこの面の指導を強化しなければならない。

2 この問いは次の3とともに56年度と他年度との正答率の差が最も大きいものである。誤答例では his が最も多く 54.1%→61.4%→40.6%である。この誤りは関係代名詞が要求されていると気づけば正答が可能であり、今後の指導に方向を与える“systematic error”<sup>(7)</sup>である。

3 give の過去分詞形として、give, gave, gaven などの誤答例が各年度において多く見られる。中学校では、基本的な不規則動詞の練習は行われていると思われるが、過去形までの場合が多く、生徒の理解が過去分詞形まで及んでいないように想像される。

### 3. ま と め

「聞き、話す」領域では、強勢された語を言い当てる面や音素識別の面で、わずかずつではあるが正答率が上がり、中学校における「聞き、話す」指導が定着してきていると感じさせるが、まだ弱形の聞き取りの面では十分とは言えない。また、聞き取りはできたものの基本的な語の綴りを間違えた者が多く、今後の指導の必要を感じさせた。

音素の識別や弱形の指導に当たっては、LL や英会話の授業を通して学生の関心を高め、まず学生自身が発音できるようにすることが必要であり、その上で外国語を聴く場合の予知能力を養うように留意すべきであろう。

「書く」領域では、基本的な文法事項は一応習得しているように見えるが完全ではなく、多くの点で今一步の定着をはかる必要が感じられた。例えば、1対1の語義にとらわれて strange が思いつかなかった点、“too~to”における“to~too”の誤り、関係代名詞の代わりに指示代名詞を答えている点、また時制に対する注意不足などにおいてである。これらの誤りはもう一步の練習により定着すると思われる。新入学生に対する指導方針を示唆するが、同時に中学校においては、訓練を要する学習事項に対する練習時間が少なくなってきたことが想像させられる。

「読む」領域では、著しい特徴として文脈の把握力の低下が挙げられる。文脈の把握力は基本的な語彙や文型、文法事項の理解など総合的な学力の基盤の上に立つものであるが、基本的学習事項の習得が完全でないために低下をきたしていると思われる。特に過去分詞の後置修飾用法や関係代名詞の用法など、主に中学校3年での学習事項が定着していない点は今後注意していかなければならない。

「聞き、話す」領域や「書く」領域では、各年度間の正答率の差があまり大きくなかったのに対して、「読む」領域では56年度と他年度との正答率の差は、小問によってはかなり大きいものがあり、予想はしていたものの中学校における週3時間体制の影響をあらためて認識させられる結果となった。今後この傾向が継続していくとすれば、新入学生に対しては中学校3年までの学習事項の復習に従来以上に重点をおいた綿密な指導計画を立てる必要があるように思われる。また、「聞き、話す」領域を除く各領域における無答の増加から低レベルの学力の入学者も予想されるが、これらに対しては日常の動機づけや忍耐強い個別指導を続けなければならない。

資料の統計上の処理として、標準偏差、相関係数を算出し、各領域間の相関を求めた。また、各年度間の有意差検定を行ったが、これらは考察を進める上で有益であった。例えば、領域別の相関では、「聞き、話す」領域と全体との相関は高く、「聞き、話す」技能は他の技能の習得とともに発達していくことがわかった。また、有意差検定においては、「聞き、話す」領域と「書く」領域では各年度の差は

あまりないが、「読む」領域では56年度と他年度との間に、それぞれ、[6]で5%、[7]で1%の有意水準で差が認められた。このような処理により各年度の大まかな傾向を把握することができ、その結果は考察の結果とほぼ一致するものになった。

3ヶ年に及ぶ一斉テストの各領域における分析を通して、各年度の新入学生の基礎学力の傾向や特徴をある程度把握することができ、その意味でこの分析の目標は一応達せられたように思われる。今後はこの結果を十分に活用して、新入学生に対する指導方針を再認識することにより、高専の語学教育の目標にまで高めるための基礎づくりをしなければならない。その上で高専の5年間の英語教育のあり方を考える時、この分析がさらに意義あるものになるように思われる。

最後にこの調査の資料の処理においては、本校の高橋恒雄、工藤幹両助教授の御助言に負う所が大きかったことを記しここに謝意を表します。

## 参 考 文 献

- (1) 語学教育研究所編「英語教育年鑑」1982年版（開拓社 1982）p. 25
- (2) 国立高等専門学校協会教育課程等委員会「昭和55・56年度教育課程委員会報告——語学教育の振興と強化策について」（1982）p. 2
- (3) 鳥居次好他「英語科教育の研究」（大修館1975）p. 287
- (4) Corder, S. Pit, "The Significance of Learner's Errors," Error Analysis, ed. Richards, J. C. (Longman, 1974)pp. 24~25
- (5) 三浦省五他編「電子計算機による英語教科書の使用語彙総覧——中学校編——1982」漢水社, pp. 64~65 及び p. 215 (55年度以前は各教科書を調べた)
- (6) Ibid., p. 136及びpp. 352~353
- (7) Corder 上掲書 p. 24

## 第一学年 英語一斉テスト

（解答はすべて解答用紙に記入のこと）

### Ⅰ テープを聞いて答える問題

問題ⅠのⅠからⅣまでは、すべてテープを聞いて答える問題です。

Ⅰ 会話がそれぞれ二回読まれます。下線を引いた語の中で、最も強く発音されている語はそれぞれどれですか。テープを聞いて確かめ、番号で答えなさい。

1. He read the history book last Friday.  
           1      2      3          4          5      6          7

2. I'm going to play tennis. What are you going to do?  
   1      2      3      4      5      6

Ⅱ テープを聞いて次の対立を聞き分けなさい。1から5まで読まれると、次にもう一度くり返されます。

1. thinと言ったらア。sinと言ったらイ。と記入しなさい。

2. the rest of his daysと言ったらア。the rest of her daysと言ったらイ。と記入しなさい。

Ⅲ 1と2の英文を聞き、英文の中のⅠ（私）は何でしょうか。1から5の中から一つずつ選んで番号で答えなさい。英文は二回読まれます。

1. 1.station 2.bookstore 3.park 4.library 5.school

2. 1.butter 2.juice 3.coffee 4.toast 5.jam

Ⅳ 1と2の質問に英語で答えなさい。質問は二度読まれます。

（テープで読まれる英文）

Ⅰ 1. "Which book did John read last night?" "He read the history book last Friday."

2 "I'm going to play tennis. What are you going to do?"

Ⅱ 1. 1 thin 2 sin 3 sin 4 thin 5 thin

2. 1 the rest of her days 2 the rest of his days 3 the rest of his days

4 the rest of her days 5 the rest of his days

III1. I am a kind of building. I have a lot of books in me. Many people come to me to read the books.

But I am not a bookstore. What am I?

2. People make me from milk and they put me on a piece of bread when they eat it. But I am not cheese or cream. What am I?

VI1. Tomorrow is Sunday. My family will go on a picnic. What's today?

2. What do you say before you go to bed at night?

㉒ 次の文の空所にどんな単語が入るか、下の日本語から適当なものを選び、英語にかえて答えよ。

A: My aunt and uncle (1) us last Sunday.

B: Where do they live?

A: In the (2) of Utah. They gave me this book.

B: What is it about?

A: It's about a (3) lake. Even (4) swimmers can float in it.

B: Really? Will you (5) it to me for a week?

A: All right. Here you are.

(貸す, 訪ねた, ふしぎな, へたな, 南) (注) Utah アメリカの州 float 浮かぶ

㉓ それぞれの( )の中から適当なものの一つずつ選び、その記号を書け。

1. Tom and I (ア. am イ. is ウ. are エ. has) good friends.

2. (ア. Which イ. Where ウ. How エ. What) a beautiful flower this is !

3. Taro is fond of (ア. play イ. playing ウ. plays エ. played) tennis.

4. You are (ア. young イ. younger ウ. the younger エ. the youngest) of the three.

5. She had to run (ア. as fast イ. so fast ウ. too fast エ. much faster) as she could.

㉔ 次の各組の文がほぼ同じ意味になるように、( )内に適当な語を一語ずつ書け。

1. Ken likes apples. I do, too. = Both Ken ( ) I like apples.

2. The girl gave me a bottle made of glass. = The girl gave me a bottle ( ) was made of glass.

3. He was so busy that he couldn't read the book. = He was (ア) busy (イ) read the book.

4. Where did I see her? I don't remember. = I don't remember where (ア) (イ) her.

5. Mr. Smith teaches us English. = We (ア) (イ) English by Mr. Smith.

㉕ 日本語と同じ意味になるように空所に一語ずつ入れよ。

1. I don't know (ア) (イ) do. 私はどうしたらよいか分らない。

2. My desk is different (ア) (イ). 私の机は君のとはちがう。

3. (ア) do you like (イ), tennis or baseball? テニスと野球はどちらがすきですか。

4. My mother (ア) (イ) ill for a week. 母は一週間ずっと病気です。

5. I (ア) think we will (イ) much snow this winter. 今年の冬はあまり雪が降らないでしょう。

㉖ 次の対話を読んで、あとの問いに答えよ。

Toshio: Have you heard the news?

Makoto: Yes, Hiroshi has told me. And I've just (a) (speak) to Toru and he's coming soon.

Ken: News, news? What news is this?

Toshio: Haven't you heard? Shall we tell (b) him, Makoto? Can you keep a secret?

Ken: Of course I can. Come on, tell me, what is this news?

Makoto: Go on, tell him. I've just closed the door.



秋田高専における新入学生の英語学力調査

Toshio : All right, Ken. This is a very great secret; (c) few people know it and I've only just heard it.

Ken : Oh, come on, tell me !

Makoto : Well, this is it—it's April (d) 1st today.

- I 1. 下線(a)の( )内の動詞を適当な形に直せ。 2. 下線(b)はだれのことか。人名を書け。  
3. 下線(c)の意味を日本語で表現せよ。 4. 下線(d)をふつうの綴りで書け。

II 次の各文の(ア)―(エ)の中で、上の対話の状況に合うものが一つずつある。それを選び、その記号を書け。

1. Makoto has closed the door  
(ア)because it is cold in the room. (イ)because he wants to keep a secret.  
(ウ)because he wants Toshio to tell the secret to Ken.  
(エ)because he wants Ken to believe that the news is a great secret.
2. Toshio and Makoto are talking about the news  
(ア)because it is a great secret. (イ)to make fun of Ken.  
(ウ)to let Ken know what it is. (エ)because their new school year has started.
- (注) come on さあさあ (相手をうながすことば) secret 秘密 make fun of からかう

㊦ 次の文を読んであとの問いに答えよ。

Once there lived a very kind man called Nicholas. He wished to give some money to an old man who lived near his house. The old man was the poorest in the town, but he did not take it.

On Christmas Eve Nicholas found him by the fire. He was sleeping there, so Nicholas got upon the roof and dropped the money down the chimney.

The old man had a daughter. Her stockings were hung above the fire to dry and the money fell into one of (a) them. Next morning the old man found the money and gave it to her as a Christmas present.

Today we call the (b) ( ) man Santa Claus and children hang up their stockings on Christmas Eve.

(注) Nicholas ニコラス(人名) chimney えんとつ hang ぶら下げる hung = hang の過去分詞形

I 次の1～5の文の中で、その内容が本文の内容と一致しないものを二つ選び、その番号を書け。

1. The old man lived near Nicholas. 2. Nicholas was sleeping by the fire.  
3. The old man was sleeping on Christmas Eve.  
4. Though the old man was poor, he didn't take the money.  
5. The old man got upon the roof.

II 次の問いに答えよ。

1. 下線(a)のthem とは何か、文中の語で答えよ。 2. 下線(b)の空所に文中の語を用いて一語入れよ。

III 本文の内容と合うように次の文中の空所に一語を入れよ。

1. The man called Nicholas ( ) very kind.  
2. Once there lived a very kind man ( ) name was Nicholas.  
3. The money was ( ) to her as a Christmas present.

解 答 ・ 配 点

㊦ (20点：I、II各2点、III、IV各3点)

- I 1 ㊦ 2 ㊧ II 1. 1 ア 2 イ 3 イ 4 ア 5 ア 2. 1 イ 2 ア 3 ア 4 イ 5 ア  
III 1 ㊦ 2 ㊦ IV 1. It's Saturday. 2. I say, "Good night."

㊧ (10点：各2点)

1.visited 2.south 3.strange 4.poor(bad) 5.lend

③ (10点：各2点)

1.ウ 2.エ 3.イ 4.エ 5.ア

④ (13点：1. 2各2点, 3. 4. 5各3点)

1.and 2.which(that) 3.アtoo イto 4.アI イsaw 5.アare イtaught

⑤ (15点：各3点)

1.アwhat イto 2.アfrom イyours 3.アWhich イbetter 4.アhas イbeen 5.アdon't  
イhave

⑥ (16点：I. 1. 2. 4各2点, 3. 4点, II各3点)

I 1.spoken 2.Ken 3.それを知っている人はほとんどいなくて, ぼくもついさっき聞いたばかりなんだ。  
4.first II 1.エ 2.イ

⑦ (16点：I. 各3点, II. III各2点)

I 2, 5 III 1.her stockings 2.kind III 1.was 2.whose 3.given

表7 領域別相関

(56年度)

(57年度)

(58年度)

	全体	A	B	C		全体	A	B	C		全体	A	B	C
全 体					全 体					全 体				
A(Hearing,Speaking)	0.63				A(Hearing,Speaking)	0.58				A(Hearing,Speaking)	0.61			
B(Reading)	0.83	0.33			B(Reading)	0.84	0.29			B(Reading)	0.86	0.40		
C(Writing)	0.82	0.33	0.48		C(Writing)	0.90	0.37	0.61		C(Writing)	0.88	0.35	0.59	

得点度数分布

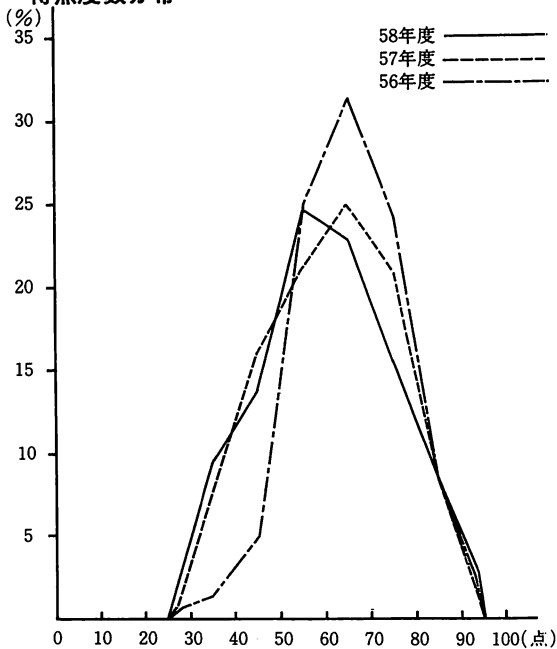


表8

階級 組別	56		57		58	
	人数	%	人数	%	人数	%
95~100	0	0	0	0	0	0
90~95	4	2.7	1	0.7	5	3.0
85~90	4	2.7	5	3.4	5	3.0
80~85	9	6.0	8	5.5	11	6.5
75~80	12	7.9	15	10.3	8	4.7
70~75	24	15.9	15	10.3	18	10.6
65~70	28	18.5	17	11.6	21	12.4
60~65	20	13.2	19	13.0	18	10.6
55~60	16	10.6	11	7.5	26	15.4
50~55	22	14.6	20	13.7	16	9.5
45~50	4	2.6	14	9.6	12	7.1
40~45	4	2.6	9	6.2	11	6.5
35~40	3	2.0	8	5.5	12	7.1
30~35	0	0	3	2.0	4	2.4
25~30	1	0.7	1	0.7	2	1.2
計	151	100.0	146	100.0	169	100.0
M	64.9		60.5		60.2	
S D	12.3		14.7		15.0	

秋田高専における新入学生の英語学力調査

表9 小問別解答状況〔正答率欄の( )内は部分正答率〕

問題番号		正答率			無答率			
		56年度	57年度	58年度	56年度	57年度	58年度	
1	I	(1)	86.8	78.8	78.1	0	0	0
		(2)	40.4	42.5	45.0	0	0	0
	II	(1)	51.7	45.9	55.6	0	0	0
		(2)	98.7	97.9	97.0	0	0	0
	III	(1)	86.8	87.7	81.7	0	0	0
		(2)	56.3	50.0	49.7	0	0	0
	IV	(1)	43.7(2.0)	34.2(5.5)	39.6(6.5)	4.0	7.5	10.7
		(2)	14.6(4.6)	8.2(5.5)	7.7(1.8)	50.3	62.3	68.0
2	1	89.4	89.0	84.1	0	2.7	1.8	
	2	81.5	74.7	75.3	2.6	3.4	4.7	
	3	3.3	13.0	34.7	48.3	37.0	26.5	
	4	20.5	20.5	27.1	60.9	56.8	58.2	
	5	68.9	49.3	38.8	12.6	19.2	28.8	
3	1	96.8	95.8	98.5	0	0	0	
	2	99.3	100	99.0	0	0	0	
	3	90.3	80.3	82.0	0	0	0.1	
	4	96.5	96.3	97.8	0	0	0	
	5	96.0	98.8	91.5	0	0	0	
4	1	100	97.9	99.4	0	0	0.6	
	2	78.8	61.6	63.9	4.0	8.2	4.1	
	3	90.7	92.5	85.8	0	1.4	0.6	
	4	44.4	43.8	46.2	4.0	6.8	3.0	
	5	38.4	30.8	36.1	2.0	2.7	2.4	
5	1	94.0	84.2	81.2	0	0.7	2.4	
	2	39.7	44.5	47.1	0.7	2.1	6.5	
	3	84.1	82.9	84.7	0	1.4	0.6	
	4	76.8	70.5	61.2	2.6	7.5	13.5	
	5	21.2	19.2	17.6	24.5	26.7	25.3	
6	I	1	83.4	69.9	80.5	0	2.1	0.6
		2	77.5	68.6	69.8	0.7	0.7	1.2
		3	20.5(48.3)	7.5(49.3)	11.2(39.6)	4.6	13.7	16.0
		4	51.0	45.2	38.5	6.0	2.7	6.5
	II	1	35.8	41.8	33.7	0.7	0	0
		2	68.2	73.3	67.5	0	0.7	1.2
7	I	71.6(23.2)	65.1(27.4)	62.5(28.2)	0	0	0	
	II	1	74.9	60.1	67.7	4.0	9.0	3.0
		2	57.0	50.8	47.3	4.6	3.4	3.0
	III	1	48.3	38.7	37.3	4.7	6.8	4.1
		2	75.5	51.8	59.1	0	0.7	1.2
		3	58.9	40.8	41.0	6.6	9.6	6.5